追悼・原紀道先生を偲んで

原先生の文芸的素質

中野政男

会長、原紀道先生は、私とは18年の年齢差があるにも拘らず、医会創設の頃から大変協力してくれ、海軍の話では妙にウマが合い、鎌倉軍国少年の会に呼ばれて若い方達と一杯やったり、アメリカでの学会やゴルフではいつも楽しく行動を共にしてくれた。

原君は医会の鎌倉例会の時、特定疾患指導料の解説に破天荒な面白いお芝居をやって見せたり、養老孟司先生を講師に迎えて哲学的なお話を聞かせたり、プロの音楽家を呼んで歌を聴かせたり、医学には「感性」がなくてはいけませんという哲学を日本皮膚科学会総会のシンポに反映させたりして、多分に文芸的、演劇的嗜好があったと思う。

そこで原君の文芸的資質に関係することを紹介したいと思う。

原君の一家は海軍一家で、お父上は海軍軍医大佐、祖父は海軍大佐、そして伯母上のご主人は海軍造船中佐、堀元美氏。

この造船中佐の堀さんは、文章が巧みで、戦後早くに『鳶色の襟章』（造船士官の襟章が鳶色だった）という本で海軍のフネについての広範な史実を書かれたほか、艦船について多方面に健筆を振るわれる一方、みずからも船の雑誌を創刊されるなど、艦船についての権威者でその美麗な文章と共に、この分野では知らぬ人のない方であった。

いつの事であったか、原君が鎌倉のNavy-Boy数人を集めて、堀さんのお話を聞く会をされた時、私も呼ばれて軍医の「赤色の襟章」を持参して楽しい懇談の夜を過ごした懐かしい思い出がある。

さてその堀さんの伯母さんに、長谷川時雨という方がある。つまり原君にとっては大伯母である。

2000.9.15　Sooke, B.C. Canadaのレストランで。左、原紀道、右、中野政男

長谷川時雨という人は、日本橋生まれの江戸っ子、大正から昭和初期に活躍した人気劇作家で『美人伝』の著作で知られ、雑誌『女人芸術』を主宰して林芙美子、円地文子などを輩出し、文学史、女性解放運動史上に大きな足跡を残した、今で言うSuper Lady。『雪之丞変化』の作者三上於菟吉と夫婦であったことで知られているが、戦後は不思議に忘れ去られてしまっている。

私は堀さんの事績を読んでいて、長谷川時雨に行き当たり、この人の評伝を読んで原君一族の華麗さに感心して、家系図を作って原君に「貴殿のFamily Treeこれで宜しきや？」と問いあわせ、原君が朱を入れたものを大切に取ってある。

原君自身もそのように思っていたであろうが、この家系的な影響が原君の文芸的素質の形成に大いにあずかっていただろう事に、今更ながら感心しているのである。

詳しくは、岩橋邦枝『評伝　長谷川時雨』筑摩書房を。

原紀道先生、さようなら

加藤安彦

例年にない７月の暑さが、まるでうそのように、秋風が身にしむ頃になりました。夢の列車に乗って旅立たれた先生は、今頃何をしておられるのかなと考えております。少々くすぶっている地球を眺めながら一杯やっているのでは……など、勝手なことを想像しながら先生との出会いをいろいろ思い出しております。

先生はたしかお父上が昭和45年に亡くなられたあと、診療所を引継がれて間もなく神奈川県皮膚科医会（神皮会）に入会されました。そして先生に初めてお会いしたのは鎌倉商工会議所で開催された神皮会第20回記念大会（S.48.２.18）の時だったでしょうか。今は亡き野崎先生や高柳先生のお手伝いをされている姿が印象に残っています。

その後、第31回例会（S.51.11.14、鎌倉市地域医療センター）、第42回例会（S.55.７.12、鎌倉商工会議所）、第50回記念例会（S.58.２.26、鎌倉市中央公民館）を鎌倉の先生方と一緒にお世話くださいましたが、昭和58年７月からは神皮会の幹事、そして集会係として、その頃から先生の持論である「過去の形式にとらわれない自由な発想」で神皮会の運営に積極的に参画されるようになりました。

特にその面目躍如なのが第58回例会（S.60.12.７、鎌倉商工会議所）で行われた、「慢性皮膚疾患に対する療養指導の実際」と題する診療劇を演壇で行うという誠にユニークなもので、参加会員一同楽しみながら診療劇を見守りました。そしてこの内容は月刊誌「皮膚病診療（Vol.８、No.４、P.393～407、1986)」に掲載されました。

昭和63年には常任幹事、企画委員、その後委員長として「神皮会の良さは企画、運営の自由さにある」との考え方から、例会の当番幹事の意見を尊重しながら、魅力のあるテーマで例会を盛り上げるよう努力され、ご自身が当番幹事の第71回例会（H.２.２.25、鎌倉商工会議所）では、「形の見方：みて同じものは同じか、みて違うものは違うか（東大解剖学教授・養老孟司先生)」、「記載皮膚科学とは何か：皮膚科学的考え方の基盤にあるもの（北里大・西山茂夫先生)」、また、第87回例会（H.７.３.５、鎌倉市中央公民館）では、「皮膚と感覚（愛知工業大自然科学教授・大島清先生)」、「皮膚と脳（東大解剖学教授・養老孟司先生)」など少々型破りのテーマでその考え方をアピールされました。

平成８年７月からは神皮会かなめの幹事長として、「目先を追わず、我々の感性を研き、高め、自ら考え、判断し、覚悟することが肝要（第100回例会の一部始終、神皮No.7　10頁)」との方針から第100回記念例会（H.11.７.４、新横浜プリンスホテル）は原幹事長主導で「例会100回を迎え、豊かな感性を」をコンセプトに記念講演「渦状癬（元神皮会会長・中野政男先生)」、「椿によせて（日本ツバキ協会会長・桐野秋豊氏)」、「超システムとしての人間（東京理大生命科学研究所所長・多田富雄先生)」、音楽を楽しむ（①日本の歌、世界の歌　②10人の女性フルートアンサンブル)、沖縄島歌、琉球舞踊（沖縄舞踊集団花ヤカラ）など盛り沢山の素晴らしい内容で、大いに盛り上がり、楽しい記念すべき例会を祝うことができました。

さらに、平成12年７月からは神皮会の４代目会長に就任され、９月に会長事務引継ぎを行いましたが、そのあと、先生の奥様と私の家内を交えて日影茶屋（葉山）での楽しいひとときがとても懐かしく思い出されます。原新会長のもとで最初の第104回例会（H.12.12.３、関内新井ホール）が開催され、翌年（H.13）１月21日には、21世紀スタートの年、さらに神皮会35周年を迎える年を祝して「2001年新春を祝う会」を北鎌倉の東慶寺で開催し、「東慶寺縁起講話（住職・井上正道和尚)」、ドキュメント講話「21世紀への証言　ピーター・ドラッカーをめぐって（NHK国際放送局局長・今井義典氏)」を拝聴し

ました。まさに原会長の斬新な企画と幅広い人脈を伺わせる会でした。

その後例会は順調に開催され、いよいよこれから原イズムが軌道に乗って本格的に動き出すのを期待していた矢先の一昨年（H.13）夏、食道癌で入院手術されたとの連絡を受けました。術後暫く経過した８月末に入院先にお見舞いに伺いましたが、たまたまＭＲＳＡの感染で状態が思わしくない頃でした。退院された後も抗癌剤の副作用で苦しまれたようでしたが、第108回例会（H.14.３.３）には出席され、会長として引続き頑張る旨決意を述べられ、会員一同一日も早いご快癒をお祈りしておりました。

ところが、７月４日逝去されたとの予期せぬ悲報に接し驚きを禁じ得ませんでした。７月６日には鎌倉カドキホールにて通夜が、翌７日には猛暑の中同所にてしめやかに告別式が執り行われました。たまたま当日は第109回例会の開催日に当たり、例会会場においても会員一同心からご冥福を祈って黙祷を捧げました。７月７日は七夕です。年に１度は神皮会の活躍ぶりを見に来て、我々をお導きください。

なお、先生は、顯学院弘濟紀道居士となられて鎌倉市扇ヶ谷の寿福寺に永遠の眠りにつかれました。

最後に、先生のことは私の生ある限りきっと忘れることはないでしょう。それは先生が旅立たれた日が奇しくも私の誕生日だったからです。

先生、安らかにお休みください。合掌。

原紀道君の憶い出

入澤該吉
鷺沼皮膚科

かつてインターンという制度があり、昭和38年（1963）春、私の在職した病院に千葉大から２名が研修に見えました。名簿順ですから最初に加藤友衛君という優れてurbaneな青年が現れました。数週後に見えた原紀道君は加藤君に比して甚だ武骨に見えましたが、この２人に共通な点は今時珍しい程の深い教養で、私に忘れかけていた旧制高校の卒業生を想い起こさせました。加藤君はまことに優雅な人ですから下品な酒の飲み方はしませんでしたが、原君と私は連日の如く新宿辺りの安飲み屋で悪酒を嗜みました。某日談偶々加藤君に及び、原君の言うには「僕はその方面では全く不調法ですが加藤は大変な男で、僕はどの位彼の尻拭いをさせられたか判りません」と。これは私にしても充分に理解出来る所でした。

私は医局を出て３年目、生意気盛りでしたからこの２人を捉まえてやれ抄読会だ、やれ病理組織デモだと引っぱり回しました。ドイツ語が余喘を保っていた頃でしたから、HautarztとかDermatologicaとかをむりやり読ませたりしました。その年加藤君は急性腎炎を患い入院生活を余儀なくされました。千葉大の先輩の主治医は、透析も移植も考えられなかったその時代、加藤は天寿を全うし得ないであろうという悲観的御意見でしたが……。

当時原君と私は共に鎌倉に住んで居りましたが連日終電午前様で、経済的にも著しく困窮して来ましたので故永井隆吉先生（当時は佼成病院）にお願いしてアルバイトをお世話いただきました。それはドイツ語の翻訳で、医学薬学はおろか機械工学まで何でも引き受け、当時としては過分の報酬を得ました。原君の学力は大したもので、昔の旧制高校の理乙にもこんな人は居なかったでしょう。ある時内燃機関の論文にキャブレターを扱ったものがあり、ここで使われるvergasen（気化する、ガスで人を殺す、アウシュヴィッツのガス室で……）という物騒な言葉がいたく原君の気に入る所となり、「先生そろそろvergasenしませんか」、心細くなって来たので翻訳で稼ごうというのか、有金を早々と気化してしま

おうというのか、とにかくこの言葉は我々の間でペットとなり、何程の金と時間が気化されてしまったか、まことに恐るべき次第でした。

昭和40年（1965）、私はドイツに渡り、ヴュルツブルク大学で勉強して居りましたが、この間原君の下さった便りは驚くべき数に上り、特に私の妻が現地で発病して鎌倉の実家に戻ってからは妻の病状、長男の現況について詳細な報告を寄せられました。精神的に最悪な状態にあった私には原君の友情がこの上ない支えとなりました。

帰国後、私の家庭には不幸が続き、私自身全くmisanthropicになってしまいました。原君と加藤君は大変心配され、千葉大出身者の集まりである篁（たかむら）会に客員として出席するようすすめてくれました。この会のことは皆様よく御承知と存じますがエトランゼの私を温く迎えて下さった先生方のことは決して忘れられません。さらに原君は「入澤先生を引っぱり出すのだ」と称し、他ならぬ本会の幹事に推薦してくれましたが、私の悪い根性は治らず、欠席を重ねた揚句に辞任しましたのは全く申訳ない次第でした。

平成11年（1999）、私の古稀の祝に出席された原君は、上述のvergasenの一件を語り、懐かしい鎌倉の、24代正宗鍛える所の小刀を贈られました。これでチーズやサラミを切りなさい、というのが原君の口上でしたが流石は正宗、チーズ所ではなく腹も立派に切れるような代物です。そういう訳で私は折にふれこの名刀を使わせて貰うのですが、その都度原君有難うと呟いて居ります。

上述のように原君が私に示された御厚志には一方ならぬものがあります。これに反し私は原君に何をして差上げたのでしょう。そう思うと内心まことに忸怩たるものがありますが今となっては致し方もありません。

御葬儀のあと和夫人から頂戴した御挨拶は強く心を打つものでした。お二人の長い結婚生活の終りに原君が過した安らかな月日のあった事を知りました。同時に原君が大好きであったドイツで修業された御長男が由緒ある原皮膚科医院を継承される事を伺い、心から有難く存じて居ります。

原紀道君を偲ぶ

加藤友衛

兄は原英道先生（産婦人科・内科）の長男として昭和13年２月11日に出生。湘南高校から父上と同じ千葉大学に入学、昭和38年に卒業。中央鉄道病院でインターンを修了したのち、母校竹内勝教授の皮膚科学教室に入局、同時に大学院に入学。大学院在学中に、岡林篤教授病理学教室に学内留学。エリテマトーデスの研究で学位を授与されている。国立国府台病院に出向のあと、昭和45年、父上の英道先生が逝去されたため鎌倉へ帰り原医院を継承。

開業に当たって、医師会長から云われたことは、皮膚科だけでは食べていけないから、内科・小児科も標榜するようにということだった。皮膚科単独標榜ではやっていけないというのが当時の常識であった。それでも兄は皮膚科だけの標榜で始めたのだった。ところが、兄のクリニックは繁盛した。これは皮膚科専門医としての腕の確かさはもとより、兄の人徳―人柄によるところ大であった。

兄が中心の皮膚科の小さな勉強会は300回を超え、クリニックの内装のリニューアルもよくやっていた。昭和50年頃には液体窒素を使い始めていたし、カルテ番号検索のパソコンの導入、レセコンはもとより、さらに専用のパソコンを使った予約システムの導入、炭酸ガスLASERの導入など進取の気性に富んでいた。

45年前、千葉大の入学手続きのひとつに身体検査があった。その時、私の前にいたのが兄であった。当時の日記を見るとその年の7月には私の家に泊まっている。学生時代は、兄とは新聞部とスキー部で一緒だった。斬新な卒業アルバムも兄が中心で作った。無光沢のグラビア印刷でたったの100部を作り、装丁も兄が担当した。印刷なので39年を経た今でも変色は無い。インターン時代には２人とも入澤該吉先生の教えを受け、皮膚科に入局してしまった。なんでも一緒にやってきた兄が居なくなるということは誠に寂しい限りである。

神奈川県皮膚科医会と関係のある“真っ先にパンツを買った”話を書き留めておくことにする。

メキシコシティで国際皮膚科学会があったのは1977年10月だったが、この時、私と伊藤光政君は神奈川県皮膚科医会のツアーに参加させてもらった。ツアーは、早めに日本を出て、カナダのバンクーバーやカルガリーを廻って学会の始まる頃にメキシコシティ入りをするスケジュールだった。

兄と伊藤君と私の３人が考えたのは、メキシコに行くこのような時でなければ南米には一生涯行けないだろうということだった。そこで、バンクーバーで１泊の後、３人はツアーから離れてリオ・デ・ジャネイロに行くことにした。翌朝、トロントへ飛んで、なぜかここでアメリカへの入国手続きをさせられた。トランジットなのに。ところがトロントからニューヨークへ行く便が遅れた。ニューヨークで、パンナムのリオ・デ・ジャネイロ経由ヨハネスブルグ行きに乗れるだろうか、と隣の白人に話しかけたところ、自分もそれに乗るんだが、乗り換えの時間が少ししか無くなった、パンナムのターミナルまではタクシーでないと間に合わない、君たちはドルを持ってないんだろうから私に付いてきなさい、一緒にタクシーで行こう。ということで必死に付いていって間に合ってホッとした。

翌朝８時にリオに着いたがいつまで待ってもトランクが出てこない。と、半袖の制服を着た係りの人が来て云うには、ニューヨークからテレックスが来ている、あなた方の荷物はニューヨークで積み損なった。明日の同便で来ることになったと。バンクーバーを発つ前の晩は山の上のレストランで今は亡き野崎先生たちと一緒にステーキを食べた。焼き具合いを１人ずつ丁寧に聞いていたけど、えらく時間がかかって出てきたのは全員の分がウエルダンだった。その時の気温は－２℃で木々の枝は真っ白だった。ところがリオに着いた時は33℃。冬服を着ていたが、着替えようにもトランクが無い。仕方が無いので街へ出てまず下着を買った。100％ポリエステルのピンクや紫のカラフルなパンツが65クルゼイロ（約1,000円）。これがブラジルでの最初の買い物になった。しかし、日本に帰ってきてからは、こんな派手なパンツは佩けない。だけど、記念にとっておこうということで３人とも未だに持っている。

こんなこともはるか遠い昔の思い出話になってしまったが、兄は今でも私の心の中に生きている。

左から、伊藤光政君、原紀道君、筆者。リオ・デ・ジャネイロで

原紀道先生のこと

苅谷英郎

原先生は昭和38年に千葉大学医学部を卒業した。インターンをしていた病院で、個性豊かな皮膚科医に出会い皮膚科学の面白さを教えられ、昭和39年、竹内勝教授の千葉大学医学部皮膚科の大学院に入学した。

原さんは湘南高校の先輩でもある。私が千葉市稲毛にあった千葉大学文理学部で２年間の医学進学課程を終え、昭和36年医学専門課程（３年生）に進み、千葉大医学部、付属病院のある「亥の鼻キャンパス」に移った時、同級生に湘南高校出身が４人いた。同じキャンパスにあった薬学部にも２人いたので、医学部、薬学部合同の湘南高校同窓会（湘葉会と名付けた）を創ろうということになり、学生ばかりでなく、大学病院にいた先輩医師たちにも声をかけ何回か会合を持ったが、原さんは出たことがなかった。原紀道という高校の先輩の名は知っていたが、昭和40年４月にインターンで千葉大皮膚科教室に出入りするようになって、私は初めて大学院２年生の原さんに会った。

Erythematodesの病理組織を研究テーマにしていた原さんは、当時の第二病理学教室（岡林篤教授）に出入りしていた。皮膚科の勤務を済ませると病理学教室に出かけ、夜遅く医局に戻ってきて酒を飲んだり、皆を誘って町に繰り出して行ったりした。インターンを終えた原さんたち５人が昭和39年に入局したのを皮切りに、数年間、毎年４、５人が入局したので、皮膚科教室は若い人たちが急に増え、活気があった。原さんは人を纏めるのが上手く、いつも我々の中心にいて勉強にしろ遊びにしろ音頭を取っていた。

大学院終了後、当時の国立国府台病院皮膚科に１年間出張の後、再び千葉大皮膚科に帰って来たが、お父上の逝去により、鎌倉に戻り跡を継いで開業された。

原さんたちが入局した後、数年間に皮膚科教室に入局した、所謂「医局で同じ釜の飯を食った」連中は仲が良い。竹内教授が定年退官され、岡本昭二教授の時代になると、この時の仲間は、２、３人を除き千葉、埼玉、神奈川、茨城、東京で順次開業していった。早くに開業した数人が集まり、もろもろの情報交換などの為に会合を持っていたが、その後、開業する者が次第に増え都心の某ホテルを会場に定め、毎月定期的に集まるようになった。この気の置けない十数人の仲間の会は、既に320回をこえている。原さんはこの会でも中心的役割を果たしていたが、闘病中の平成13年11月、奥様同道でこの会に出席したのが最後になった。

原さんは、昔から私に色々とアドバイスをしてくれた。インターンの時、「皮膚科に入るなら大学院に入れ」と言ってくれ、横浜に戻り開業する時も、「神奈川県で皮膚科をやるなら、まず神奈川県皮膚科医会に入れ、すばらしい勉強会だ」と入会を勧めてくれた。千葉大皮膚科にいた時、東京地方会に行くと、いつも前から２列目くらいに座っていて「平塚の中野ですが」と時々質問する短髪のオジサンが居るのは知っていた。この人が神奈川県皮膚科医会会長だとは、開業するまで知らなかった。千葉大皮膚科出身者の殆どいない神奈川県皮膚科医会で、短期間に多くの先生方と知り合いになれたのも原さんの紹介のお蔭である。その後、中野、加藤、原会長の下で19年もこの会の常任幹事を務めることになろうとは、当時は思いも寄らなかった。当番幹事に当たった皮膚科医会30周年記念例会で、特別講演でなく「東京金管五重奏団」の演奏会にしたのも、原さんのアイデアを拝借した。

第100回日皮総会のOffice Dermatologyを会頭の慶応大西川教授に依頼され、舞台廻しにA先生をスカウトし、あとは我々の仲間全員が参加して、学会としては前代未聞の仮面劇を行ったのも、原さんのユニークな発想と西川教授のご理解が生んだもの

だ。原さんはこのあと間もなく病に倒れた。64才という若さでの死は、惜しみて余りある。
「どうせやるなら、面白く楽しくやろう」をモットーに人生を駆け抜けた原さんのご冥福を心よりお祈り申し上げる。

原紀道センセイと ラブホテルで過ごした一夜

伊藤光政
県外会員

題名を一瞥して、「ああ、あの２人はそういう関係だったの」と早合点して、妙に納得づらで読むのをやめずに、どうか最後までご辛抱ください。

もう30年以上前のこと、11月に、長崎で日本皮膚科学会西部連合地方会、福岡でアレルギー学会が開かれた年、西部に演題を出していた小生は終了後、福岡で原サンと合流、国家公務員共済組合の宿舎に宿をとった。千葉大を卒業後郷里の福岡に帰って当地の病院に勤務していた共通の先輩を２人で訪ねて、ご馳走になった。食事のあと、クラブだの、バーだの美女の侍る店をはしご。当時はまだキャバレーなんていう所も幅を利かせていたっけ。ふと気がつくと、「門限」ぎりぎりではないか！（共済組合の宿舎は設備が良い割りに安いので、「門限」などというお固いおまけまで付いてくるのでした）あわてて電話して「少し遅れます」と言うと、「ああいいですよ、お待ちしています」と、こころよく引き受けてくれた。先輩が「もう１、２軒いいだろう」と誘ってくれたので、のこのこと付いていったのが失敗の始まり。

1972年、香港にて（原 和さん提供）

1970年、妙本寺にて。長男尚道君（現原皮膚科医院院長）と（原 和さん提供）

宿に帰り着いたのは、真夜中を過ぎて暫く経った頃。なまじ電話で頼んで暫く起きて待っていてくれたので、今度は入り口の扉を押しても叩いてもまったく応答なし。公衆電話から電話しても誰も出ない。九州は暖かいという先入観があって、コートも持たずに来たのだが、11月の夜ともなれば、福岡を吹く風は、東京と変わりはしない。途方に暮れているとはるか向こうにネオンが！　たしか「嵯峨野」という名の連れこみ宿であった（博多で「嵯峨野」、横浜で「ベニス」などというその土地とかけ離れたネ

ーミングは古今を通じて大体ソノ種のホテルですよね)。

事情を話すと、「それはお困りでしょう」と、宿泊オーケーとなる。「長いつきあいだけど、伊藤クンと同衾するなんて初めてだね」とか言っているうちは、未だ平和だった。あまり幅の広くない蒲団に枕が2つ。もともと眠る目的の夜具ではないので、並んで寝るには窮屈きわまりない。男同士向き合って寝るわけにもいかないので、仕方なく背中合わせに横になる。原大人も小生も今ほどではないが、体格が細い方ではなかったので、背中に冷たい隙間風がどんどん入ってくる。小生はとうとう我慢できなくなって、風呂にお湯を張って入浴。少し人心地がついて寝床に戻る。今度はセンセイがモゾモゾと起き出して、風呂場に行った様子。なかなか戻ってこないので心配になって声を掛けると、「君が入ったときはお湯だった？　湯気が出ているから安心して飛びこんだら、下は水なんだ。出るに出られないよー」とのたまって、湯船の中でガタガタ。お湯タンクの温水はどうやら小生がみな使ってしまって、原さんには湯気を立てる分しか残っていなかったと見える。

夜が明けるのを待ち兼ねて、本来の宿舎に戻ると、係員に「お早いお帰りで。きのうはずいぶんお待ちしていたんですよ。ご朝食だけでも召し上がりますか」と、皮肉まじりに声を掛けられた。

遥か昔の、ラブホテル1泊の顛末です。その後も、原先生にはずっとおつきあいをいただいて、いろいろな共通のエピソードが山積しています。もう新しいエピソードは生まれません。思い出を心の中で反芻して、私の余生はいつまで続くことやら。

1970年、診療室にて（原　和さん提供）

原先生、いつかまた

塩谷千賀子

先生の御自宅にお見舞いに伺ったのは6月の下旬で、まだ妙本寺参道の紫陽花も鮮やかでした。奥様より1週間程前から体調を崩され入院された由伺いましたが、その時はまたお目にかかれるだろうと、こんなにも早く逝かれるとは思いも及びませんでした。

先生と初めて話をしたのは、私が父の医院を継いで間もない頃のある会での席でした。先生から声をかけていただき、「山崎先生は穏やかで物静かな先生でしたね。実は僕が鎌倉で急に開業することになって、その時に私の所に訪ねてみえられたんですよ。私が玄関に出て行くと、『裏駅で開業している山崎といいます。此の度先生が開業されるということをききました。お父さんの分もぜひ頑張って下さい。先生の論文を読ませていただきましたが、とても良い論文でした』と挨拶されました。本来なら私の方から山崎先生の方に挨拶に行かなくてはならないところだったのに、それがとても印象に残っています」と言われました。

僕は親父を早くに亡くしましたからと、その後も

何かの折りにこの話が出ました。あるいは、私の父に先生もご自分のお父様の面影を重ねていられたのかなと思ったものでした。

これが切っ掛けとなり、医師会や皮膚科医会のこと等色々教えていただきました。

鎌倉の皮膚科医会の中にあっては、先生は常に一歩先を歩いていらした印象があります。ただ、マイペースで勝手に歩いて行ってしまうのではなく、一定の距離を保ちながら、私達が遅れそうになると少し先の角の所で追いつくのを待っていてくれるという、舵取りのような存在だったと改めて思うのです。

これからの皮膚科は厳しい時代になっていきますよ。アメリカの今の医療状況がやがて日本にもやってきますと、皮膚科医への危機感を話されていたのもかなり以前のことだったと思います。アメリカの皮膚科医会にも度々出席されていられた先生からその様な話を何回か伺いました。その頃私は母の介護でなかなか家を空けることが出来なかったのですが、

「塩谷さんも今は無理でしょうけれど、いつかぜひアメリカの皮膚科医会にいらっしゃいよ。個人を尊重する会ですから、一緒にいる相手が誰かなんて詮索はしません。first nameで呼びますから、先生も誰か仲の良い人と来ればいいですよ」

と誘っていただいたこともあり、その時は誰と行こうかと、しばし空想に耽ったりしたものでした。

楽しいことを思いつくのも先生ならではのことでした。先生が鎌倉市医師会の役員をされていた時のことでした。総会には男性はタキシード着用、女性はフォーマルドレスで来るようにとオフレが回ったことがありました。当時の会長は、“全く原君は何を考えているんだか”と、それでもまんざらでもなさそうな様子でした。そして実際にその当時の医師会の公式行事では若手の会員を中心に確実にタキシードが滲透していったのです。

人間中身の充実は容易ではないけれど、外側だけならなんとかなるというのです。そしてこの外側だけでもきちんとするという努力が大切なことで、相手に対する気持につながりますというのが先生の持論でした。

いつも元気で前向きでいらした先生が、市内での会の帰り道、この頃私はつくづく生かされているんだなと思うようになったんですと言われました。当時サルコイドーシスと腰椎ヘルニアに悩んでいらした頃と思います。その言葉から何かスッキリした感じを受けたようにその時は思ったものです。この生かされているという言葉はその後もう一度聞きました。２年前夏、私が大腸癌の手術で入院中にお見舞いをいただいた時です。手術が上手くいって良かったですね。先生もこれで生かされることになったのだから、生かされている間は、お互いに頑張りましょうと、その時の先生の顔と言葉は数日前のことのように思えます。舵取りのいなくなった鎌倉は淋しくなりましたが、いつかその後の話を持って伺います。安らかに。

原先生とのご縁

栗原誠一

初めて原先生とお会いしたのは、六六会というゴルフの会でした。記録を見ますと昭和54年11月25日のことで、私が大学助手５年目の怖いもんなしの生活をしていた頃です。

大先輩たちの会にゲストとして参加を許されたのですが、当時は原先生が最年少の会員だったと思います。そのなかで先生は「天才少年―天才は忘れた頃にやってくる」とあだ名がつくほどに、ときには

爆発的な馬力を見せてくださる山あり谷ありの楽しいゴルフでした。ところが会話を始めると豹変されるのです。全学連の闘士に洗脳されているようで、軟弱ノンポリな私は先生の多重人格（？）に驚きながらも、ついつかまってしまって耳にたこができるほどアジ演説を聞かせていただきました。その後しばらくして、昭和60年頃からでしょうか、先生は変わられましたね。とても人なつこくなられ、いつもニコニコされて「人生は遊ばなければいけません」と、六六会の海外遠征でも昼夜分かたずエンジョイすることを教えてくださいました。次いで神皮の幹事長になられてからまた脱皮され、「仕事をしてゴルフもできる、こんな良いことはありません」とお説教してくださる変な若年寄になってきました。会長になられる前後からはついに悟りを開かれたかのように、「この世を生かされているのだから、精いっぱい生きなければいけない、ご縁です」が口癖になりましたね。23年間で、左翼の天才少年に始まり解脱した高僧になるまで、先生ご自身で万華鏡を廻して見せてくださったようです。これから先生はどんなふうに進化されるおつもりだったのでしょうか。ショーがキャンセルされてしまい、寂しいかぎりです。

神奈川県皮膚科医会は出身大学や年齢にとらわれない、開かれた医会だと思っています。先生は同年代の先輩方と一緒に、リベラル派の先頭を走っておられました。誰でも自由にものを言える雰囲気を醸しだし、常日頃から「すべての会員が楽しめる医会をつくろう」、「若い人の意見を積極的に取り入れたいので、幹事でなくても委員会に参加してもらおう」とおっしゃっていましたね。次世代をになう若い力を掘り起こすことと、各個人が楽しみながら活動する会を目指されることを熱く語っておられました。たしかに短時日でしたが、先生が大切にされた会の理念は、われわれの心に強く焼きついています。

合掌。

ドラマー、原紀道

原　尚道
原皮膚科医院

父、原紀道は色々なことに興味を示し、幅広い趣味をもって人生を楽しく謳歌していました。しかし普通の人間ですから、当然苦手とするものもあります。その弱点の１つは楽器ではないかと思います。もちろん、クラシック音楽を好みオペラをこよなく愛していましたから、聴くことに関しては深い造詣をもっていたはずです。問題は奏者としての適性です。父もその点については十分自覚していたようです。その弱点を克服しようと奮闘したエピソードをご紹介いたします。

もう15年以上前のことです。当時鎌倉のテニスクラブに参加していた父は、テニスを楽しんだ後も仲間と集まりワイワイ過ごす機会が増えました。世の中には音楽の才能に恵まれた方々が大勢いらっしゃいます。集まりの余興で色々な楽器を演奏する友人たちを、父が羨望の眼差しで見ていたことは想像に難くありません。その中のあるグループがハワイアンバンドを組んでいました。メンバーが足りないと

2001年（平成13年）5月、自宅の前にて。孫の智道（3歳）と原紀道（63歳）

でも誘われたのでしょうか、ある日父は宣言しました。「ドラムをやる」。

楽器一般の演奏経験など皆無であった父です。大胆な決断だと思ったのでしょう。両手両足をバラバラに動かす必要のあるドラムの演奏が、右脳と左脳をバランス良く発達させる実に良い手段である点を、自分自身に言い聞かせるがごとく私たち家族にしきりと強調していました。思い立ったら即行動。神田の楽器屋で友人に勧められるまま、全くの素人初心者が最高級のドラムのフルセットを買ってしまいました。買ったのは良いがどこへ置くのか？　和室が１部屋空いていましたが、畳部屋にはあまりにも場違いな代物です。やむなく応接間に運び込まれました。それほど広くない部屋の３分の１が、ピカピカなドラムのフルセットで占拠された異様な光景は、お客様を驚かせるのに十分なものでした。

道具の次は練習です。独学でどうにかなる代物ではありませんので、家庭教師を頼みました。最初からドラムセットの前には座らせてもらえません。光輝くドラムやシンバルを横目で見ながら、まずは小さなドラム１個が練習台です。毎週１回、夜になるとトントコ、トントコと、ドラムというより太鼓に近い音が響きわたりました。隣近所の方々には、夏祭りの稽古でも始まったのかと思われたでしょう。全くの未知なる経験です。手だけを使った「太鼓」の練習でも困難を極めたようです。しかし父は実に熱心に取り組んでいました。家族で旅行に出かけた時も、車のハンドルをリズムに乗せて指でタンタンタンと叩いていた父の姿を思い出します。ただ、応接間のドラムセットで練習していた姿を私はあまり記憶していません（それなりに練習していた、と母は申しております。父の名誉のため付け加えさせていただきます）。２年後であったか３年後であったか定かではありませんが、徐々に音のリズムが速くなり、叩くドラムも１個から２個、３個と増え、合間に足も使ったシンバルの音が挟まるようになりました。なんとかドラマーとしての体裁が整い、ハワイアンバンドの一員として演奏するまでに漕ぎつけました。

私は記念すべきその演奏会に立ち会っていないため、どのような出来事が起こったのかは知りません。ただ、その演奏会を境にドラムに対する父の熱意が徐々に薄れていったのは事実です。父は多くを語りませんでしたが、仲間との対比の中で自分の才能に見切りをつけた、もしくは不向きであることを思い知らされたようでした。誰にも触られなくなったドラムは応接間の飾り物と化し、その後まもなく弟、宣道の友人に喜んで引き取られていきました。

結果はともあれ、苦手なものも人生を楽しむ材料としてしまうその生き方に、身内でありながら感服しています。

1978年（昭和53年）、原紀道40歳。右側4人は原家（右端は私、原尚道9歳）、左側は父の親友、伊藤光政先生とご家族